書評　森山卓郎著『日本語の〈書き〉方』（岩波ジュニア新書、二〇一三）

書き方が分かる・書き方の教え方が分かる

―「書き方」の言語科学的理解と「書くこと」の自覚的実践との往還型学習への期待―

達富洋二

一．はじめに

本書は、「よりよい文章を書くこと」を目的として、言葉に注目した文章の書き方についてまとめられたものである。基礎編は、書くことのベースを、具体的な文字表記、語彙、文法、段落という構成で示され、応用編は、典型的で重要な文章の形態に応じた書き方を、具体的な言語表現を手がかりにしながらまとめられている。

これまで日本語学と国語教育学との橋渡しとなる論考を数多くまとめてこられた筆者による「書き方」についての集成としての本書は、書き方が明示的に提示されたものでありたいへん分かりやすい。具体的事実を示しながら「なるほど！」と膝を打つような日本語の「書き方」のしくみについて平易平明に論じられていることで、多くの読者はあらためて日本語を見つめることができ、言葉を楽しむきっかけを得るであろう。言葉を教える指導者にとっては教える内容を具体化することに役立つであろうし、学習者にとっては自身のこれまでの言語運用の仕方を振り返る手がかりとなるとともに、言葉の使い手としてのこれからのてびきになるであろう。以下、本書の魅力について具体的に記述したい。

二．言語科学としてのエビデンス

国語は曖昧な教科であるという印象は指導者にも学習者にも少なくない。「どうも国語はなまぬるい」と感じる中学生の声もある（刈谷二〇〇三）。

本書では、文章を「このやっかいで楽しいもの」としつつ、基礎編と応用編とに分けて、言語科学的な理論と「書く」ことの事例を重ねて論じることで、「やっかいなもの」でも「なまぬるいもの」ものでもないように明快に説明している。基礎編では「文字表記」「語」「文」「段落」について四章の構成で述べられているとともに、文の主述関係、文の連結や分解、修飾・被修飾、語順、助詞、呼応などについても詳細に扱われている。応用編では、同じく四章に分けて「報告文」「論説文」「詩・俳句・短歌・随筆・物語など」について文章の

形態とその書き方について述べられている。

文章の形態の違いによる書き方の固有性について知ることは、指導者にも学習者にも有益である。本書を学習指導要領解説とあわせて読むことで「書くこと」の授業での「書き方」を明らかにすることができる。例えば、高等学校国語総合「B書くこと」には、文章の形態として「説明、記録、報告、意見、主張のための文章」が示され、「工夫して書く」こととは「書く目的を実現するのにふさわしい文章の形態や文体、語句を選び、構成や展開、言葉遣いなど表現の仕方に様々な工夫を凝らすことである」とされている。本書では、「報告文に必要な情報や立場」について「わかりやすく伝える（報告文）」、「論説文の構成」について、「論説文をどう構成するか?」に詳細に述べられている。

本書は、言語生活の事実をエビデンスとして検討されている。そのため、読者は言葉を使っている現実を振り返り、「たくさんの言葉を知っていれば、それだけ、たくさんの表現ができる」ことを実感し、言語運用に自覚的になれるであろう。

三．国語科「作文」のてびき

本書は指導者にとっても学習者にとっても有効な作文のてびきである。基礎編での知識が応用編での実際に書く場で生かされるようになっている。とかく「何を書くか」に偏ってしまいがちな作文指導であるが、「どのように書く」について明確にした本書の意味は大きい。

言語科学的理解と自覚的実践が連続して織りなす往還型学習を通して、読者は書き方を習得し、書く力を習熟することが可能であろう。学習者は理解したことをもとに実際に書き、書いたものを本書によって繰り返し点検することで、「書く行為」をメタ認知し、自覚的になっていくことが予想される。

四．おわりに

本書の価値を語るには評者としてその力が十分ではないことは自覚している。多くの読者が実際に本書を手にされれば、この価値や本書が社会に還元する力をどれほど有しているかを実感されると確信している。

最後になるが、本書が高い価値をもった研究書であり、作文読本であることはいうまでもないが、なによりも本書そのものが洗練されたパラグラフライティングによる論理的な文章であり、まさに『日本語の〈書き〉方』の最良のモデルであることを記しておきたい。

（佐賀大学教授）